

J-PAO 個別商談会 第7回「農と食の出会い」 秋田の自然とこだわり

当機構は、10月24日(火)に、第7回「農と食の出会い」を秋田県と連携して開催します。

東京・築地場外市場内のキッチンスタジオを会場に、秋田県内でこだわり農産品やその加工品を生産する、選りすぐりの農業者8社が出席します。この商談会は、事前に出展者や商品の詳しい情報をバイヤーに紹介のうえ、商談の時間をあらかじめ組んだ『予約制』とすることで、当日じっくりと商談に臨めることが特徴です。また、予約がない方でも当日のスケジュール

ルに余裕がある場合は商談が可能です。

秋田のおいしいものを見つける絶好の機会です。お知り合いのバイヤーの方に、ぜひお声がけください。

なお、商談会に関する詳細は、当機構担当(稲永・荻原)までお気軽にお問合せください。また、当機構ウェブサイトでもご覧いただけます。

■開催日時・平成29年10月24日(火) 9時30分～15時00分
■場所・築地魚河岸スタジオ
(<http://www.j-pao.org/news/2017/02/69/>)

アドバイザーミーティング 10月19日(木)に東京で開催

農業経営アドバイザーミーティングは、アドバイザーのスキルアップや連携推進を目的に毎年実施される研修です。今年度は、合格者数累計が4千名を超えたことと、林業・水産業経営アドバイザー制度が創設10周年を迎えたことを記念して「農業・林業・水産

業経営アドバイザーシンポジウム」として日本教育会館一ツ橋ホール(東京都千代田区)にて開催されます。

当日は、株式会社トビムシ(東京都港区)代表取締役 竹本吉輝氏による基調講演や農林水各分野で活躍される事業者や有識者を迎えるのパネル

- 参加者及び出展予定品…
- ①株式会社 あぐりっこ大館 (大館市) 枝豆
- ②農事組合法人 羽後紫佐 (羽後町) ベビリーフ、冬キャベツなど
- ③農事組合法人 鏡田ファーマーミング (鹿角市) 冷凍枝豆、米
- ④農事組合法人 新興エコーファーム (大仙市)
- ⑤合同会社 ダイセン創農 (大仙市) トマトジュース
- ⑥梨フレッシュ (男鹿市) 梨ヴィネガー、梨ドレッシング、梨塩だれ、梨醤油だれ
- ⑦なるせ農園 株式会社 (東成瀬村) いぶりがっこ
- ⑧企業組合 美郷ストロベリー (美郷町) 冷凍いちご(スムージー用)

ディスカッションが行われるほか、各分野の熟練のアドバイザーによる活動事例の紹介があります。農業分野からはJ-PAO会員の松田恭子氏が発表されます。

農業経営アドバイザー制度の運営事務を受託する当機構は、今回のシンポジウムにも事務局として参加します。

詳しくは当機構ウェブサイトをご覧ください。

(<http://www.j-pao.org/news/2017/02/66/>)

日経調シンポジウム 「日本農業の20年後を問う」 新たな食料産業の構築に向けて

当機構理事長 高木 勇樹が委員長を務める、一般社団法人日本経済調査協議会 食料産業調査研究委員会が、20年後の農業のビジョンを描くため、2年間にわたり検討した結果を「日本農業の20年後を問う」新たな食料産業の構築に向けて」としてとりまとめました。この報告会を兼ね、9月28日(木)に東京都内にてシンポジウムが開催されました。

当日は、農業者、学識経験者、JA全中、ジャーナリスト及び流通関係者などが登壇し、多様な意見が聞かれました。報告書はこちらからご覧ください。

(<http://www.nikkeicho.jp/res/1710/takagi/>)



当機構理事長 高木 勇樹が「日経調の提言を振り返って」と題して講演

□ 会員の活動紹介

9月の企画運営委員会では、三井住友海上火災保険株式会社様から、「農業ビジネスへのアプローチと支援策～『スマート農業』を支援する『RobiZyプロジェクト』の紹介」と題して、「農業ロボット・ICT」を有効に活用し、農業の成長産業化に向けたアプローチをお話いただきました。

プレゼンテーションでは、三井住友海上火災保険様が取り組むビジネスマッチングや販路拡大、農業分野へ若者を呼び込む仕掛け、ロボットの農業分野での活躍をご紹介いただくと共に、ロボットの普及促進を支援する「RobiZyプロジェクト」の概要についてご説明がありました。また、産学官の連携で設立したNPO法人 ロボットビジネス支援機構により、次世代ロボットの普及に向けた多様なビジネスをご紹介いただきました。

□ 専門部会の動き（9月分）

9月の各部会の活動は以下の通りです。

【支援活動のあり方検討】

会員に対し昨年度実施したJ-PAOの活動に関するアンケート結果を参考に、会員メリットや役に立っていること、J-PAOのプラットフォーム機能の高度化について意見交換を行いました。

今回は、J-PAOの過去の相談対応実績を会員の目線で分析し、J-PAOの現有する機能を確認します。

【新サービス企画開発】

農事組合法人同士の合併に関する相談及び経営の見える化支援（管理会計導入等）についての対応を検討しました。

▶既存サービスの改善

J-PAO研修農場についてこれまでの議論を整理。今後のあるべき姿について、意見を集約中。

集約した意見は、次回以降人材育成部会に提出予定。

【人材育成】

今回の主催セミナーの内容検討及び同業他社とJ-PAOの同内容チラシを比較検討しました。

▶J-PAO主催セミナーは、客観的な立場で内容を伝えるというスタンスが大事

▶チラシは、「文字数を減らし、わかりやすい表現にする」必要がある

【事業化・販売支援】

前回まで討議した6次化商品について、生産者を訪問して討議内容を伝えたこと、その際、生産者からあがった感想や今後の対応などを、部会メンバーに報告・共有しました。

9月からは、新しい6次化商品を取り上げ、以下について評価しました。

▶討議商品について、生産者や商品の情報、想定ターゲット、生産者の思いなどを部会メンバーで共有

▶商品パッケージや討議商品のイメージなどについての意見交換

▶今回は、メンバーが実際に使用した感想から、議論を開始

□ 主な活動（9/1～9/29）

- 9/1 第116回企画運営委員会
- 9/5 販売支援（静岡、岡田事務局長、稲永）
- 9/5～7 人材育成（福島、高田）
- 9/6～7 農業融資目利き研修（宮崎、義家会員）
- 9/11、12 農業融資目利き研修（奈良、岡田事務局長）
- 9/12 販売支援（山口、稲永、荻原）
- 9/12 販売支援（山梨、岡田さ）
- 9/14 販売支援（山梨、稲永）
- 9/14 商談力強化セミナー（福島、高田）
- 9/15 人材育成（千葉、岡田事務局長）
- 9/19 販売支援（兵庫、稲永）
- 9/19 販売支援（福島、高田）
- 9/20 販売支援（山梨、稲永）
- 9/25 販売支援（秋田、稲永）
- 9/26～27 農業融資目利き研修（岩手、稲永）
- 9/26 人材育成（群馬、高田）
- 9/27 人材育成（山梨、高田）
- 9/29 平成29年度部署横断的研修会（埼玉、稲永）

J-PAO参与 × J-PAO参与 ～コラボレーションのご案内～



J-PAO参与 株式会社アウラ心理教育センター
aulabrand
design 本多英二氏
が、J-PAO参与 深山
陽一朗氏が経営する深山農
園株式会社のウェブサイト
を作成しました。
ぜひ、ご覧ください。

深山農園：<http://fukayaman.com/>

Aula brand design：<http://www.aula-pec.jp/bd/>

IKKAN IKKAN いっかん先生の往復書簡コーナー（前編） IKKAN IKKAN

「いっかん先生」の往復書簡、最初のお相手は新卒採用の応募倍率が100倍という「イオンアグリ創造株式会社 福永 庸明 様」です。

拝啓 大泉 一貫 先生

秋冷の候、時下ますます清祥の段、お慶び申し上げます。
高木委員長、本間主査をリーダーに委員として参加していただきました。イオンアグリ創造株式会社の福永庸明と申します。食料産業調査研究会では、「日本農業の20年後を問う」という大きなテーマの中で、大泉先生の「日本農業の問題点とグローバル化への課題」と題してお話を頂きありがとうございます。

我々イオンアグリ創造株式会社は2009年11月に農業法人として、イオングループの農業を運営する会社として設立いたしました。農業に関しては、全くの素人の集まりでしたが、農業に対するDREAMや志を持ち運営を開始しました。初年度は、2・6ヘクタールの農地を地域の地権者の方々からお借りし、キャベツ、小松菜、水菜を栽培。収穫時期をうまく予想できず、施設内では、小松菜、水菜がほとんど成長し、アブラナ科のきれいな黄色い花が一面に咲き乱れ、露地ではキャベツがべと病にかかり、対応が後手後手になり大きくならず、農業の難しさを実感した年でした。勘や経験がない我々が農業をするには、データを蓄積することやイオングループの連結のため、四半期毎の決算をしなければならぬことも踏まえ、富士通株式会社さまと組み、システムの導入を実施しました。現在もシステムを農業に合う形に改善をしながら進めています。

現場の農業運営を考えるにあたり、2010年にグローバルGAPを取得し、食品安全、労働安全、環境保全の三本柱を中心に改善活動につなげております。参入時は農地法の改正前で、企業による農業参入自体あまり良い印象がありませんでしたが、現場で働いている従業員の皆が、真面目に地域に根差し農業に取り組む、地域の雇用、コミュニケーションを取ることで、今では地域コミュニティの一員として受け入れてもらっております。若い従業員が多いので、地域の方々に助けて頂きながら、悪戦苦闘の毎日ですが、少しずつですが成長を実感しています。2020年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されるに当たり、日本の農産物をどう提供すべきなのか、提供できる

のか、国際的な基準を充たしていない現状をどうやって変えていくのかが大きな課題だと思っております。現在、弊社では、グローバルGAPの取得支援を行っており、この国の農業の発展に少しでも寄与できればと考え取組んでおります。

現在全国で21か所約400ヘクタールの農場運営を若い従業員と共に実施しております。栽培している品目数も当初の十倍以上となり、地域の伝統的な作物も行政等から依頼を受け、地域の方々に、技術指導を受けながら栽培をしております。これからの農業のスタイルとして、若者の就職先の一つとしての農業を考える必要があると思っております。若者の農業への関心が非常に高く、弊社への入社希望者は非常に多い状況です。若者をワーカーではなく、マネージメントできる人材として育成していくことが、これからの農業経営を担っている者に課せられていく重要なポイントであると思えます。地域、人間、平和そして、中心にお客さまがある、がイオングループの基本理念ですが、農業はまさに地域産業であり、人間産業であり、平和産業であると思えます。20年後の食料産業がどうあるべきなのかを農業を通して考えていきたいと思えます。

今後とも、ご指導宜しくお願ひします。最後になりますが、季節の変わり目ですので、ご健康にはくれぐれもお気を付けください。

平成29年9月吉日

福永 庸明（ふくなが やすあき）

1995年 ウエルマート㈱

2006年 (現マックスバリュ西日本㈱) 入社

2009年 マックスバリュ西日本㈱

マックスバリュ西日本㈱

コーディネーター部長

チーム サブリーダー

イオンアグリ創造㈱

生産本部長 兼 管理本部長

イオンアグリ創造㈱

代表取締役社長(現任)



敬具

IKKAN IKKAN IKKAN IKKAN IKKAN IKKAN IKKAN IKKAN

拝復 福永 庸明 様

高木理事長が委員長をされている(一社)日本経済調査協議会「食料産業調査研究委員会」ではお世話になりました。その後、福永さんをお招きした内閣官房「構造改革徹底実現会議」でもお会いできる機会があったのですが、私が欠席してしまい失礼していたところでした。

農業への参入にゼロから尽力されている由、敬服いたしていません。様々な困難を克服されているのが伝わってまいります。おそらく今年も、夏の天候が悪く作物の生育にとつて難しい年になつているのだと思います。

仙台は、36日間連続で雨が降るといふ異常気象でした。気温も低く、通常であれば、冷害でコメ不足となるでしょうが、作況は「やや良」との予測で、その気配はありません。私は、冷害は酉年、外れても前後1-2年といった仮説を持っています。およそ12年ごとということですが。

横道にそれてしまいますが、24年前の1993年の冷害時には食糧危機がきたと受け止められ、コメの買いだめやタイからの輸入と大騒ぎとなりました。12年前の2005年もやはり冷害でしたが、1993年と違って比較的静穏に受け止められました。コメが足りなければパンやそばを食べれば良いと考えたからといわれています。そして今回は、冷害やコメ不足はもとより品質劣化の話も全く出ていません。

このような状況の中に、私は、コメの相対的な地位低下が見取れると思っています。かつてコメは、国家を背負う作物でした。高度経済成長期でも、コメの出来・不出来が地域経済を左右するといわれていました。それがいつの間にか農家の人たちの老後維持作物といわれるようになりました。

イオンアグリ創造株式会社(以下イオン)が新規参入された2009年は、もう「年寄りの年金代わり」と言った意味合いもなく、一体誰が日本の農業を担っていくのだろう、との不透明感をいや増していた時期でした。担い手の高齢化や耕作放棄地が増大し、農業は既に国民全体で責任を持つて取り組まなければならなくなつていたので。イオンはそうした時代の要請に応えたといつてよいでしょう。

それにもかかわらず、福永さんが新規参入に大変ご苦労された様子も書簡から伝わってきます。農村の秩序を乱すなどといった、農村世論が企業参入に否定的だったことも大きな要因です。ただ、これは農協が意図的に刷り込んだ思想で、農村の本音とは違っていると私は思っています。農家は1970年以降、農

村工業導入促進法などによって入ってきた企業を、兼業先としてむしろ歓迎していたぐらいです。

歓迎ムードにありながら、企業参入農業が難しいのは、やはり資産としての農地は信頼の置ける人に耕作してもらいたいとする考えが農家に根強くあったためと思われれます。福永さんはそれを上手に解きほぐしていかれたのでしょうか。

私は農村に限らずこれからの社会にとつて重要なコンセプトは「信頼の形成」だと考えています。「信頼の形成」は農作物を作ること以上に悪戦苦闘し、苦勞する課題です。イオンは、今では地域コミュニティの重要な一員として受け入れられているようですが、そうした活動があるからこそ、全国で21か所約400ヘクタール、当初の十倍以上の栽培品目を実現できたのだと思います。

福永さんは、農業の素人とおっしゃいますが、イオンの農業には、農業問題解決のヒントが幾つもあると考えています。その一つが、全国21カ所の農場です。もう一つは、四半期決算を義務づけられたことから作り上げたIT化です。農業はどうしても自然に左右され、農繁期と農閑期が出来てしまいます。それが工業との効率の違いとなつていますが、農場の全国分散により、農繁期を延ばそうと計画すれば伸ばせる条件が生まれます。ITによる適期作業や適地適産の実現が、その裏付けとして利用できると思います。実に農業の先端をいつているのではないかと私は思っています。

これからも貴兄、貴社が前進されんことを期待しています。

敬具

平成29年9月吉日

大泉 一貫(おおいずみ かずぬき)

1949年 宮城県生まれ

農学博士 宮城大学名誉教授

専門は農業経営学

日本プロ農業支援機構理事

日本地域政策学会名誉会長、

「世界の知を復興へプロジェクト」代表

政府の各種会議に参画するほか、農業

経営の成長を目指す農業改革、地域政策

などへの提言活動に取り組む

